

肉代五弗也

その軍醫が、齒醫者の出身であつたか何うかは知らないが、實に結構な發見で、獨創的な意見はこんなのを言ふのかも知れない。さしづめ愛國婦人會の會員達は、下らないお喋舌の會合なきは止めにして、まづ自分の伴の齒を掃除してやらなければならない事になる。

米國の華盛頓であつた事——ある日、土地で名高い判事のKといふ男が、豫て顔肥癭の肉屋の店さきを通りかかると、でつぶり肥つた店の主人が、いつもの愛嬌笑ひをしいしい、「一寸……」

と言つて呼びよめた。

判事は立ち停つた。肉屋の主人といふのは、いつも剽輕な世間の噂を聞かせてくれるので、大抵の場合その店先で立停つても損はしなかつた。

「お呼びよめして相済みませんが、一寸旦那に伺ひたいと思ひやしてね。肉屋の主人は軽く頭を下けた。肉を盗まれましたのは、法律上どんな手續きをしたもんでがせうな。」

「肉を盗まれたのか、夫は告訴しなくちやならん、打棄つてくると、癖になつて可かんからね。」判事は肉の事なら、値段からビステキの味加減まで、法律できうにでも出来る事考へてゐるらしかつた。

「まつたく癖になつていけやせん。」肉屋の主人は二三度軽く頷いた。「ところが盗んだ奴が人間ぢやないんで困つてしまひやす。」

「人間ぢやない、何だね。それでは。」

「狗なんでけす。」

「狗だつて、そんなら飼主から肉代を辨償させるまでの事さ。」判事は何でも角でも法律で押し通したいらしかつた。「そんな狗を飼ふなんて怪しからん事だ。」

「ところが、旦那、その狗つてわのが、お宅の斑なんでけす。」

肉屋の主人は氣の毒さうに揉み手をしながら言つた。

「宅の狗か。」判事はだしぬけに途の真中で鼻を抓まれたやうな顔をした。「それぢや仕方がない盗まれた肉代は幾らだつたね。」



「お氣の毒さまですね、五弗でけす。」肉屋は叮嚀に頭を下げた。判事はねぢ曲たやうな笑ひ方をしながら、懷中から五弗取出して、肉屋に拂つた。それから二三日するに、肉屋の店に、件の判事からの仕拂請求書が來た。主人はげんさうな顔をして封を切つた。なかには

牛肉盜難事件  
鑑定料五弗也  
右請求候也

と認めてあつた。肉屋の主人は舌打をしてまた五弗を仕拂つた。

### 愛國心を胃の腑

獨逸の鐵血宰相ビスマルクが、ある時ウィルヘルム老帝の御馳走になつた事があつた。その折の獻立がきなんだつたかといふ事は、他人の食膳にあまり興味を持たない私の知らない事だが、唯一つその時卓子の上に載つかつてゐた酒が、三鞭酒だつたのは、何よりもよく知つて

ゐる。

ビスマルクは自分の洋盃に注がれた三鞭酒に唇をやつた。その唇は自分の戀女房を接吻する外には、いろんな國の外交官を相手に噓ばかり言つてゐたが、それでも酒の味はよく判つたものだ。ビスマルクは一寸洋盃の縁を嘗めると、その一刹那眉の上に太い皺をよせた。皺は低聲で

「不味い、何といふ不味い三鞭酒だらう。」

と呟いてゐらしかつた。

ビスマルクは太い手を伸ばして、卓子の上に置かれた三鞭酒の盃を引き寄せた。こんなに不味くてゐて、平氣で帝王の食卓に上つてゐる酒場が、きこの出來だか一寸見て置きたかつたのだ。酒場は白い手帛で包んで、わざとレットルを隠してあつた。ビスマルクは眼をあけて老帝の顔を見たが、その一刹那老帝が石版畫のやうな眞面目な顔をして、じつと宰相を見かへしてゐるのに氣が注いだ。

「陛下、ちよつとお同じ致しますが、この三鞭酒はさうこの産でござります。」



ビスマルクは手帛に包まつた酒壺をさしながら訊いた。

「このでもない。」と老帝はいつに似ぬ堅い調子で返辭した。「わが獨逸國で出來たのだよ。」

「道理で、ひきく不味いと思ひました。」と、ビスマルクは獨語のやうに言つて、英吉利生れの婦人でも見るやうに、馬鹿にした眼つきで其の酒壺を見た。

「不味いかも知れん。」老帝は唇の端に心持微笑を浮べた。「だが、朕は愛國心で酒を飲むといふ事を知つてゐるからな。」

老帝の皮肉に宰相も黙つてはゐなかつた。

「あいにくと、私の愛國心は胃の腑の入り口で停まつて居りますので。」

ビスマルクは恚う言つて、胃の腑と愛國心との繼ぎ目でも示すやうに、心もち椅子の上へ反りながら兩手で横つ腹を押へた。

女の顎髻

戦争と顎髻——といふと、何の事だらうと、變に小首を傾げる人があるかも知れないが、戦

争では平素の様に、さうさう顔を剃る事も出來ないので、顎髻は伸び放題に伸びる。夫が戦争後もつと其儘生やして置かれるか、何うかといふ事が、彼方では今好事家仲間の話題になつてゐる。

日露戦争後、生き残つた兵士の多くが、鼻の下にちよつぱり記念の髻を生やしてゐたのは、誰もがよく覺てゐる事だ。一體髻を生やしたり、剃つたりするのは、何かの機會がないと一寸行り難いもので、米國でも南北戦争以前までは、今の米國人のやうに、顔を綺麗に剃つたものだが、戦争後は顎髻を伸ばす事が流行つて、一頻り夫が無いものは肩身の狭いやうな思ひをする事さへあつた。

それにつけて、今度の戦争が済むで暫くは、屹度顎髻の流行する時代が來るだらうと豫言してゐる者がある。——少くとも顎髻のないものは、戦争の洗禮を受けなかつた者として、婦人達から蔑まれるに相違ない。婦人に蔑まれまい爲には、男子といふ男子は、蛙の様に三つ返りまでもするものである。顎髻を伸ばす位は何でもない事である。

顎髻といへば、女にも夫を持つてゐた人達は少くない。日耳曼皇帝マキシミリアン一世の娘



に、長い頸髻を持つてゐるのがあつたのは名高い話だ。一七〇九年アルトワの戦役で、捕虜になつた或る婦人が、一尺五寸もある頸髻を生やしてゐるといふので、態々彼得大帝の前に引張り出されて、御威にあつかつた事があつた——。やくざな男すら、頸髻を生やさうといふ世の中である。女がそれを真似たところで少しの差支もない。

名文句

米國の勃土敦にペン先きの製造業者がある。數多い同業者を壓倒して、店のペン先きを賣り弘めようとするには、何でも廣告を利用するに外には良い方法は無かつた。で、一千弗の懸賞附きで、ペンに関する獨創的な名文句を募集する事に定めた。

懸賞附きの廣告が發表せられると、方々から應募原稿が山のやうに集まつて來た。整理掛りが汗みづくになつて、夫を取り調べてゐると、なかに一通大判な用紙に、劍先で書いたかと思はれるやうな太い文字で、

「ペンは劍よりも偉大なり。」

と認めてあるのがあつた。そして御叮嚀に附箋までして、

「一寸都合がありませんから、懸賞金は電報爲替でお送り下さるやうに。」

と添へ書までしてあつた。整理掛は、それを見て一寸調弄してみたくなつた。で、早速手紙を出して、貴方の應募原稿は素晴しく立派に出來てゐるが、それだけの名文句が貴方の獨創であるといふ證據さへあつたら、懸賞金は直にお届けしやうと言つてやつた。

すると、折り返して返事が來た。一體直に手紙の返事を寄す人には神信心の厚い、正直者が多いものだが、この應募者も察する所、正直者だつたに相違ない。返事には恚うあつた。

「私の送つた文句は、私が何處かで讀み覺れたものか、夫とも自分の頭から出たものかはつきりとは申し上げられません。然し私は今日迄本といつては、國民讀本と舊約聖書の箴言しか讀んだ事がありませんから、この二つの本に無い文句なら、私の拵へたものとして差支ない筈です。重ねて申します、懸賞金を折返し電報爲替で送つて下さい。」

だが、笑つては可けない、この應募者は讀本と箴言と——書物を二冊も讀んでゐる。書物を



二冊も讀むといふ事は、日本では贅澤の沙汰だとしてある。

### 馬は美容に害あり

今朝の新聞紙をみると、若い女が馬に蹴られて死んだといふ事が載つてゐる。氣の毒な事だ。だが、注意しなければならぬのは、馬は女を蹴飛ばすのみならず、其の上に女を不潔にさへするものである。蹴飛ばされて、息が絶ゆる位ならまだ辛抱が出来るが、不潔にまでされては逆も溜つたものではない。美しいといふ事は、生命があるといふ事以上に大切な物と思ふと、馬は男と一緒に女にとつては目の敵である。

伊太利のヴェニスには美しい女が多い。世界中のどの都に比べても、美しい女にかけては決して負を取らない。何故ヴェニスに限つて、そんなだらうと理由を訊いてみると、醫學者の返事は極はつきりしてゐる。それはヴェニスは音に名高い水の都で、馬が居ないからださうだ。大抵の都會では、ざつと十分おきには、屹度荷馬車がかたびしと地響きをさせて通るものだ。騒々しい其の物音は人に厭な氣持を起させるばかりか、安眠を妨げる事が夥しい。安

眠は何よりも容色を美しくするものだといふ事を思ふと、荷馬車の音も聞かないで、ぐつすり眠る事の出来るヴェニス女の美しいのに何の不思議はない筈だ。

米國のある女學校で、生理の教師が安眠は何よりも健康のお薬だと言つて聞かせるに、生徒の一人が衝立つて質問をした事がある。

「先生、人間は一體幾時間ほど眠つたらいいのですの。」

先生は嚴べらしく答へた。

「男子が六時間、女子が八時間、そして馬鹿者が十時間。」

女生徒は嬉しそうに叫んだ。

「いいわ、私女であつて、おまけに馬鹿だから、これから十八時間眠る事にするわよ。」

その小娘が世界中の一番標緻よしだつたか、さうかは私も知らない。

### 冒險小説

忙しい世の中だ。眼がまはるほど忙しい世の中だ。猫のやうに背を圓つこくして哲學を考へ



てゐると、電話がやかましく我鳴り立てるし、しつほり戀でもしてゐると、窓の外を嫉妬家の電車が、狂人のやうな聲を立てて駆けやり廻る。ほんとに一寸の間もじつとしてゐられない世の中だ。

斯ういふ忙しい世の中では、是非骨休めの道樂を持つてゐない事には逆も生きては往かれないが、然うかといつて、今言つた通りの忙しい世の中だ、骨休めも従つて手つ取早く片づくもので無くてはならぬ。碁將棋のやうに相手が要つたり、時間がかつたりするものでは逆もいけない。この意味からナポレオンは閑がある、小娘のやうに絹絲を取り出して、指に絡んで綾取をしたものだ。

もと「アウトトルック」の主筆をしてゐた米國のリマン・アボット氏は、そんな折には極つたやうに十錢本の冒険小説を取り出して讀む事にしてゐる。趣味の教養の低い米國の紳士仲間では、この冒険小説黨が少くない。長く那地の醫師協會の會長を勤めてゐたパウガン氏なども、忙がしい間に閑を見つけると、冒険小説を手取る事にしてゐる。

大統領ウィルソン氏なども、同じやうに冒険小説に讀み耽る一人である。氏はまたその小説に

さへ讀み耽る事の出来ない程の、ほんの一寸した閑を見つけた折には、窓硝子を指先で叩き叩き下らぬ小唄を謠ふ例になつてゐる。

何事も思ひ思ひの世の中、其の冒険小説を讀みさして、こくりこくり居睡をしてゐたこと、で少しも悪くはない。

### 居士と大姉

小説家のK氏の家では、先日祖母さんが亡くなつた。愈々葬式といふ事になつて、祖母さんが先年血脈をうけた事を思ひ出した遺族の人達は、早速棺のなかへ納めやうと思つて、祖母さんが一生の間大事にしてゐた箱を開てみると、何時の間にか戒脈が紛失なつてゐるのに氣が注いだ。

血脈といふものは、手つ取り早く言つたら、女學校の卒業證書みたいなもので、これが失くなつてゐたからといつて、お嫁入には少しも差支ない筈だ。またこれを拾つた人があるにして、夫をもつて自分の持參金代りに嫁入口を捜すわけにも往かない。先づ失くした方にも損が無ければ、拾つた方にも得は往かない代物だが、夫にしても祖母さんが血脈の入つてゐない箱を一生



の間大事にかけてゐたかと思ふに、遺族の人達は何か變な氣持になつた。  
 で、檀那寺に頼んで、新しく戒名を附て貰ふ事にした、お寺の坊さんはげげしい色の法衣を引掛て、鸚哥のやうな風をしてやつて來た。そして勿體ぶつて引導を渡したが變な事には、祖母さんの戒名が

「——居士」

となつてゐた。遺族の人達は自分等の耳を疑ふやうに、顔を見合はせたが、誰の耳にも「居士」と響いたのに違ひはなかつた。で、早速坊さんに注意をした。坊さんは鸚哥のやうな法衣を被て、鸚哥のやうに習ひ覺れたお經の文句を繰返して、それで無事に亡者を極樂へ送りつけたらしい得意な顔をしてゐたが、遺族の注意を聞くと、さつと顔色をかへて、直ぐ引導のやり直しをした。そして何喰はぬ顔で、

「いね、なに、死んでしまへば男も女もありませんよ、みんな同じですよ。」

「いね、なに、死んでしまへば男も女もありませんよ。」

坊さんは巧い事を言つた。してみると、冥土には活動寫眞小屋のやうに、婦人席は區劃がつけて無いものと見える。女好きな若い男にとつて、こんな結構な世界がまたと有らうか。引導を受けるなら今の間だ。

### 獨身主義者

哲學者のK氏は今だに獨身で居る。それを不思議がつてゐる或る男が、露きつけにK氏に訊いた事があつた。

「先生、何だつて貴方はそんなに獨身を立て通していらつしやるんですね。」  
 哲學者が獨身で居やうと、郵便箱がひとりほつちで立つてゐやうと、そんな事は何うでもよかりさうなものだが、夫を問題にしたところを見ると、訊き手は餘程結婚といふものが好きな男に相違なかつた。

K氏はにやりと唇を歪めて笑つた。

「別に理由はないがね、唯眞理を研究するのに忙しいもんだから、結婚する閑が無かつたんだ



ね。

大變結構な心意気だが、しかしK氏がそれ程までに忙がしぶりをして捜してゐる眞理といふものも、實際手に取つて見れば、結婚同様案外下らない物かも知れない。

アメリカにジオウジ・エドといふ文士がある。K氏のやうに血眼になつて眞理を捜してゐるか、何うかは知らないが、K氏同様に獨身主義者である。そのエド氏がある時知り合ひの結婚式に獲ばれて列席した事があつた。

側にゐた近眼の某夫人は、エド氏の顔を眼鏡越しにじろりと見ながら言つた。

「エドさん、貴方は今だにお獨りであるらつしやいますが、御結婚なさるよりも、其の方が道德的だと思つてらつしやるんですか。」

「いな、何う仕りました。獨身文士は皮肉な眼つきで夫人を見かへした。『私の経験によりまして、獨身である男は、結婚した男よりも確に人が悪いやうですね。』

「貴方もさう思つてらしつて、まあ、皆さん、お聞きなすつて、今のを。」

近眼の夫人は、勝ち誇つたやうに、居合はす夫人達の顔を見比べた、皆は急に蠟燭をこもした

やうに明るい晴れやかな表情をした。

「エドさん。』」一番年嵩らしい婦人が呼びかけた。貴方がそれ迄に懺悔なさいますには、何か理由がお有りです。聞かせて戴けないで……」

「お安い御用です。』エド氏は洋盃の飲みものに一寸唇をあてながら言つた。

「何故といつて、奥さん、女房持ちの男が怖がるのはたつた一人の女ですが、獨身者は女全體を恐ろしがるんですからね。」

## 梅の下かけ

出雲松平家の茶道に、岸玄知といふ坊主が居た。ある時松江の市街外れをぶらついてゐるに、穢い小百姓の垣根に花を持った梅の樹が目についた。梅は大隈侯のやうに老齢で、加之にまた大隈侯のやうに杖に凭りかかつてゐるが、玄知はその姿が氣に入つたので、早速百姓に掛合つてみると、百姓は幾らか食つた價を切り出した。

玄知は家に歸つて、これまで持ち慰さむだ茶道具の幾つかを賣拂つた。そして金子を懐中に、



いそいそと小百姓を訪ねて往つた。取引が無事に済むと、玄知は腰にした瓢をほきいて、花の下で酒を飲み出した。百姓が夕方野良から歸つてみると、玄知は花の下で狗ころのやうに肝を掻きながら轉寢をしてゐた。

それから幾日か経つたが、玄知は一向樹を持ち運ぼうともしないで、毎日のやうにやつて來るので、百姓は不思議でならなかつた。

「旦那、一體あの梅の樹はさうして呉れるだね。」

「さうもしないよ。あの儘さ。」玄知はけろりとした顔をしてゐた。

「だつて、お前様、高い金出して、俺がの買取つたぢやねわか。」

「さうさ、買取るには買取つたが、家は邸が狭いから、いま迄通りお前の許に預けておく積りだ。」

百姓は麥飯と水で出来た自分の哲學では解き難いものに出會したやうに頭へ手をやつた。「預かれなら、預かりもしようがの、實が生つたら持つて往くだかね。」

「いや、實は要らない。玄知はその梅の實のやうな圓い頭を掉つた。乃公は花を見ればいいの

だ。實はお前に呉れてやるから、精々樹に氣を注げてやつてくれ。」

「實は要らねだつて。百姓は眼を睜つて不思議な茶道の顔を見た。「俺實が生るから金を貰つただ。花見するだけなら、お前さんが幾度來たつて、彼是叱言いふ俺でねだ。金は返すだよ。」

百姓が金を取りに家へ歸らうとするのを、玄知は適て引きとめた。

「いや、止しにして呉れ、花がお前のものなら、幾ら見たつて面白くない。自分のものにして初めて熱々に見てゐられるのだから。」

百姓は自分の知らなかつた珍らしい嘘でも聞かされたやうに、胡散さうな表情をして首をふつた。

### 將軍の鼻

遣歐米軍の司令官バアシング將軍の鼻は、今米國のワイオミング州にある地方切つての富豪である。州の首府シャイエーンにだけでも、四十六軒の家作を持つてゐる。それが孰れも素晴しく立派なものづくめである。



そのシャイエンの市街に、一人の老つた小學校の校長が住んでゐる。長い一生を振顧つてみても、何一つ碌な事は仕出来してゐないので、此の頃では他と話す時には、いつもパーシング將軍の舅を自慢する事に決めてゐる。名高い將軍を娘婿に持つたばかりか、しこたま財産をさへ持つてゐる。何といふ幸福な男だらうと言つて。

ある時友達がこの老校長を訪ねて來た。校長は市街をぶらつきながら、途途將軍の舅の自慢話を持ち出した。すると、道の曲り角で大きな旅館の前に出た。校長は怖てて友達を引きこめた。

「見なさい、この建物も將軍の舅さんの所有です。」

友達は旅館の高い窓を振り仰いで感心した。

市街を曲ると、その通りには幾つかのかつちりした會社向きの建物が立ち並んでゐた。こんな街に事務所でも置いて、株券の利廻りでも考へてゐたら、定めし氣持がよからうと思はれた。校長はその前へ來ると、慌ててまた友達を呼びこめた。

「見なさい、この建物もみんな將軍の舅さんの所有です。」

次ぎの市街では、小さつぱりした住宅向きの建物が幾つもなく目に留つた。こんな住居に入つて家賃もきちんきちんと拂つて、加之に結婚しないで済まされるものなら、此の世は天國だらうと思はれた。校長はその前に來ると、また立ち停つて言つた。

「見なさい、此の建物もそつくり將軍の舅さんの所有です。」

暫くすると、二人の目の前に、宏壯な、素晴しく金のかかつたらうと思はれる建物が現れた。周圍には美しく刈り込まれた芝生があつて、色々の珍しい花が咲いてゐた。友達は校長を振り向いて訊いた。

「立派な家ですな、誰方の所有ですか。」

「これですかい……」校長は自慢さうに鼻を動かした。「これが、その將軍の舅さんの宅です。」そこから少し往くと、美しく鏡のやうに光つた湖水があつた。白い雲の一片が立ち停つて、女のやうに自分の姿をうつしてゐた。友達は景色に見惚れながら訊いた。

「いい湖水だ。誰のだらう、やつぱり將軍の舅さんの所有なんですか。」

「さあ。」老校長は行き詰つたやうに頭へ手をやつた。「いや那の方のぢや無からう、多分神様の



所有でがせうよ。」

「神様の……成程ね……」と友達は皮肉な眼で校長の汗ばんだ顔を見た。「神様の所有にしても、いつれは將軍の舅さんからお買取りになつたのだらうが、きの位お仕拂ひになつたか知ら。」

魚を食ふ人

天龍寺の巖山和尚が、ある時、食後の腹ごなしに、境内の池の畔をぶらぶらしてゐた事があつた。池には肥れふとつた緋鯉だの、真鯉だのが、面白さうに、戯けあつて、時々水の上へ躍り上るやうな事さへあつた。

巖山和尚は立ちまづて池のなかを覗き込んだ。世捨人の和尚の身にとつても、納所坊主の他愛もないお談議を聴いてゐるよりか、鯉の戯けるのを見てゐる方がずつと面白かつた。和尚は夢中になつて凝つて見とれてゐた。すると、だしぬけに後から、

「和尚さん。」  
と呼ぶ聲が聞けた。

和尚は後方を振り向いてみた。そこには近所の悪戯つ見が一人衝立つてゐた。

「和尚さん、あの鯉一尾わてにお呉なはらんか。」

子供は今和尚の目の前へ筋斗がへりをした大きな鯉を指さしながら言つた。

「ならんならん。和尚は木の株のやうな頭をふつた。」

「この鯉はみんな飼つたるのやさかいな。」

「そない言はんぞ、一尾だけお呉なはんか、和尚さん。」

子供は嬌へたやうに和尚の袖を引張つた。和尚は笑ひ笑ひ袖を引き離した。

「いや、ならんならん。鯉を捕るのは殺生やよつてな。」

子供はわざと戯けたやうに、指先で和尚を突つく真似をした。

「そない言つたかて、和尚さん、自分でこつそり捕つてはる癖に。」

和尚は眼を圓くして子供の顔を見入つたが、流石に何うと言ひ解くわけにも往かなかつた。

ベンヂヤミン・フランクリンは僧侶さんのやうに菜食主義で暫く押し通して来たが、ある時

何かの折に魚を料つてゐた事があつた。すると、その魚の腹から小魚が二三尾出て来た。



婦人の病氣

「何だ、魚め、仲間同士で友喰ひをやつてゐるんだね。」  
 フランクリンは腹の底から吃驚してしまつた。「そんなだつたら、何も遠慮するんではなかつたつけ。」  
 それからといふもの、フランクリンはふつつり肉食主義を止めて、魚を食べ出した。そして鯉のやうに肥り出した。

醫者の診察室には、病人も来れば健康な人も来る。醫者は一々それを診て、病人には病氣でないやうな氣安めを、健康な人には病氣がある様な言葉をかけなければならぬ。夫が出来ない、その診察室は兎角評判がよくない。

英國にジョン・アバネシといふ名高い外科醫があつた。長らく聖バアソロミウ醫院に勤めてゐたが、物言はずの沈黙家と作法なので聞けた男だつた。ある時若い貴婦人がこの醫者の診察室に入つて来た。婦人の手首は一寸脹れ上つて熱を持つてゐるやうだつた、醫者は碌す

つほ診やうともしないで、ぶつきら棒に訊いた。

「熱りますか。」

「ぶきつき痛むんですわ。」

貴婦人は美しい眉を蹙めながら言つた。

「巻法なさい。」

醫者は一言言つたとき、鉛筆のやうに突立ち上つた。貴婦人は不安心さうな眼つきをして歸つて往つた。

次ぎの日、婦人はまた診察室に入つて来た。醫者はじろりと横目で睨んだ。

「癒りましたか。」

「いいね、昨日よか悪いやうですわ。」

貴婦人は神ころのやうな悲しさうな目つきをした。

「もつと巻法なさい。」

醫者はさう言つた儘、この美しい患者を置いてきほりにして外へ出た。



それから二日目にまた貴婦人が診察室に入つて来た。今度は打つて變つて、世界が花びらになつたやうな笑顔をしてゐた。醫者は訊いた。

「癒りましたか。」

「はい、お蔭ですつかり快くなりました。」

婦人が象牙のやうな手首をつきつけるのを、醫者は見向きもしなかつた。

「何でもなかつたんでさ、貴女の神経からだつたんです。」

### 學 校 長

米國大統領ウイルソン氏がタフト氏の次ぎに、初めて大統領候補者として打つて出た頃、ミシガン大學の總長某氏が地方を旅行した事があつた。某氏は同じ大學總長仲間といふので、ウイルソン氏にも昵懇の間柄だつた。

汽車でも喫煙室では選舉談が頻に取交されてゐた。なかに一人ちよつびり鼻の尖つた狐のやうな表情をした、商人らしい男が、口汚くウイルソンを罵るのが殊更耳立つて聞けた。總長某

氏は癢にさへて口を出した。

「最前から承はるごころでは貴方はウイルソン君がお嫌ひなやうですね。」

商人は胡散さうな眼つきで總長を見かへした。

「ウイルソン氏ですか、無論好きません。」

「何故です。」

「理由は簡單です、那の人が大學の總長だつたからです。」

商人は口に入れてゐた噛み護謨の滓をべつと床に吐き出した。「私は一體學校長といふものを信じません、那の輩に一人だつて碌な人間が居る筈はありませんよ。」

總長は煙草の脂でも嘗めさせられたやうな、苦い顔をして、その儘黙りこくつて了つた。京都大學の荒木總長が、まだ醫科大學長をしてゐた頃、ある夏の日盛りに白シャツ一枚になつて、大學の圖書館に入つて来た。そして其處に居合はせてゐた圖書館長S氏の顔を見ると、だしぬけに喚いた。

「S君、君は圖書館長、僕はまた醫科大學長、お互に長の名のつくものに碌な物は無いね。」



「成程……」S氏は頭のなかで長と名のつくものを数へ立ててみた、村長、郡長、署長、署長……實際長と名のつくものに碌なのは無かつた。考へてみるとそんなもんですな。」

すると、丁度そこらの書物のなかから、黽のやうにひよつくりと禿頭を持ち上げたものがあつた。荒木氏は其の方へ目を遣つてはつと思つた。かねて顔馴染の某中學校長であつた。荒木氏は唐瓜のやうな大きな頭へ手をやつた。

「だが、S君、そのなかでも中學校長は別物だね。中學校長には偶々に偉いがあるよ。」

夫を聞くに、件の中學校長は氣耻しさうにひよつくりと頭を下げた。辭書は校長を庇ふやうに兩肩を怒らして、禿頭を隠し立てをした。

## 米 隠 し

大阪で米騒動が持上つた少し前、それに氣づいたある米屋は、持米の大部分を檀那寺に擔ぎ込んで、その保管方を頼んだものだ。すると住持さんは魚と酒とで脂ぎつた顔をにこにこさせて、

「拙僧が預かつたからには大丈夫や、大船に乗つた氣持でゐなはれ。」

と頭陀袋のやうな下つ腹をわざわざ一つ叩いてみせた。米屋は安心して引下つた。

住持さんは庫裏でちびりちびり晩酌をやりながら、土間に積んだ米俵を見た。そして萬一米屋が頓死でもして、この米俵がそつくり自分の有になるのだつたら、こんな結構な事はないと思つたらしかつた。その代りには米屋には、他一倍お經をたんと讀んで、菩提を弔つてやつてもいい筈だつた。

暫くすると、住持さんは小僧を呼んだ。小僧は三人居て、三人とも變な歪形な頭を持つてゐたが、呼ばれたので、素直に庫裏に集まつて來た。住持さんは町に米騒動の起つてる事を話して、預かつた米俵の一件は誰にも洩してはならない、よしんば本尊様の前であらうと、暖にも出すのではない、本尊様は米屋よりも米を購ふ方の人達を大切にされるからといつて堅く口止めをした。

「そやけき、萬一嗅ぎつけて米を取りにでも來たら……」と住持さんは蟹のやうな赤い顔を撫でました。「其折は拙僧が説教してやる分のこつちや。なんほ一揆やかて拙僧の説教聽たら納



まるで極つゝる。」

小僧達は感心したやうに、めいめい歪形な頭を下けた。

さういふ口の下から、急に山門の方に騒々しい物音がして、貧しい人達が入つて来た。米屋の小僧の口から預け先が洩れたので、皆は米を取り返しに來たのだ。

「やい生厩坊主、これは何だ、出すぎた眞似をするに承知せんぞ。」

先頭に立つた片眼の男が、庭の米俵を指しながら、恚ういふと、後に續いた人達はわいわい喚き囃した。

見ると、住持さんは疊の上に蜘蛛のやうに平べつたくなつて、口のなかで、小聲で本尊様のお名を唱へてゐる。三人の小僧は慌てて住持さんの眞似をして、歪形な頭を下けた。

暫くすると、四邊が靜かになつたので、小僧達はひよつくり頭を上げた。土間には人影も米俵も見えなくなつてゐたが、住持さんは相變らず蜘蛛のやうに平べつたくなつてゐる。小僧の一人が名を呼ぶと、住持さんは恐る恐る頭を上げた。そしてきよるきよる四邊を見まはしてゐたが、土間に誰一人ゐないのに氣がつくと、

「もう誰も居くざらんのか、ほんまに無茶しよるがな。」

と噛みつくやうに言つて、急に低聲になつて小僧達の顔を見た。「そやけら、拙僧がお辭儀しよつた事、誰にも言ひなはんや、言ふと見つゝむないよつてな。」

### 馬を煽ぐ女

大阪の福島邊に動物好きの夫人が居る。この頃の日盛りに近所の問屋へ荷役に来る馬子が、荷馬をその夫人の住居の格子戸に繋いでおく事がよくある。無學な馬は、無學な役人と同じやうに市民を蹴るものだといふ事を知つてゐる馬子は、馬の手綱を思ひきり短く結んでおく事を忘れない。

夫人はそれを見るに、直きに飛んで出て来て、四邊に馬子が居ないのを見ると、  
「まあ、可哀さうに、こんなに縛られてゐて、こんなにか苦しからうよ、さあさあ緩くり息をつくといい。」

と言ひ言ひ幾らか手綱を弛めてやる、身體の樂になつた馬は、すぐ人間を蹴る事を思ひ出すら



しいが、自分を樂にしてくれた婦人の手前、さういふ亂暴な眞似も出来ないで、おどなく前脚で地面を掻いて済ましてゐる。馬は若い大學生と同じやうに、婦人から恩を被た場合に、取分け紳士の振舞をするものである。

夫人はそれからバケツに水を波々と掬ひて来て、馬の鼻先につきつける。馬は人間と同じやうに鬚鬚と水だけで生きられるものではない、ちよいちよい枯草をも食べなければならぬが、枯草の無い時には水だけでも辛抱出来るので、美味さうに舌打をして水を飲みはじめた。やつと水の御馳走がすむと、夫人は今度は團扇を持ち出して来て、馬の額際からそろそろ顔ぎ出すのだ。馬は見ず知らずの婦人から、こんな手厚い養應をうける自分の身の幸福を思つて、ほれほれと眼を細めながら、漢詩か俳句かの事でも思つてゐるらしい顔つきをしてゐる。何故といつて、人間のする色々の藝術のなかで、軍人や馬にも出来るさうなのは、漢詩と俳句との外には無い筈だから。

一度こんな養應を受けた馬は、其の氣持よさが忘れられないものか、今度そこを通りかかる時には、さうかするとまた格子戸の前に立ちまらうとする。しかし馬よりも伶俐なのは馬子

で、馬がそんな事を忘れてゐる場合でも、馬子はきつと夫を思ひ出して極つたやうに馬を格子戸に繋いで往かうとする。

夫人の談話によると、馬一匹を煽ぐのは、随分の手間ださうで、それだけの手間を厭はなかつたら、世の中の亭主は五人位涼しい目が出るさうだ。だが、亭主を煽いで何の爲めにならう。少くとも馬は亭主のやうに煽がれた上に、酒が欲しいとまでは言ひはしまい。

### 鼠に噛まれた英雄の心臓

獨逸の軍隊が、佛蘭西の國境深く入り込んでゐるにつけて、巴里つ子は、何ぞと言つては大ナポレオンを想ひ出してゐる。ナポレオンを思ひ出すにつけて、またしても繰返されるのは、この英雄の心臓の話である。

心臓の話といふのは外でもない、——忘れもせぬ、一八二二年五月、この英雄の死骸が棺に納められやうといふ時、側にゐた一人の軍醫は馴れた手際で死骸から心臓を切り離した。

軍醫は切り取つた心臓を洋盃のなかに入れて、卓子の上においた。多くの軍人の血と、多



くの美人の涙にも、平気で堪へる事の出来た心の臓は、透き徹つた硝子の底で蛙のやうに顔へてゐた。軍醫はこの心の臓に、通夜をするつもりで、じつと眼を睜つて、洋盃のなかを見つめてゐた。

ふと硝子の碎ける音がしたので、軍醫は吃驚して眼をあけた。知らぬ間についてうとうと居睡つてゐたものらしい。見ると、床に落ちて、粉々に碎けてゐる洋盃の側を、大きな灰色の鼠が、血だらけな英雄の心の臓を啜へて小走りに逃げのびやうとしてゐる。

ジョセフインの柔かい手でも、英國海軍の大きな力でも、何うする事も出来なかつた英雄の心の臓を、鼠はたつた一口に頬張つて、その儘逃げ出さうとしてゐるのだ。軍醫は猫になつたやうな氣持で、慌て鼠に飛びかかつた。實際尻尾の持合せがあつたら、軍醫はその儘猫になつたかも知れなかつた。

軍醫はやつと心の臓を取り返す事が出来た。鼠が吐き出した英雄の心の臓は、失態でもしたやうに所々破けてゐたさうだ。

「實際吃驚したよ。でも、まあ漸と取り返すには取り返したがね……」

軍醫は後々になるまで、何ぞと言つては、その夜の話をしたものだ。

だが、噂によると、取り返された心の臓は、ぐちゃぐちゃに噛み潰されてゐるので、夫をナポレオンの心の臓だといつて、神様の前に差し出すわけにも往かなかつた。で、軍醫はこつそり羊の心の臓を切り取つて、夫を酒精漬にして銀の壺に密封したまま、棺のなかに納めたのださうだ。

險呑な世の中だ、女に自分の心臓を約束した男よ、汝は何よりも先きに鼠を要心しなければならぬ。

温

室

温室は言ふまでもなく植物を育てあける場所だが、然うかといつて、外にも色々い役目をしてない事もない。差し當りこの殺風景な世の中で、戀をするのに一番恰好な場所とは訊かれたら、おほつびらには言はれないが、自分はそつと耳打をして、

「温室だよ。」



と教へてやる積りである。こんな事を無代で見ず知らずの他人に聞かせるのは惜しいやうなものだが、何事も親切にしなければならぬ世間だから。

名は忘れたが、亞米利加で名高い女優に、妙齡の娘を一人持ったのがある。——女優だからといつて、娘を産んではならぬといふ法はない。女優が亭主持になると、人氣が衰へはしまいかと氣遣ふのは詰らぬことで、女優はどんな境涯にゐても、自分を美と蟲惑の幻像だといふ覺悟を忘れてはならぬ。

その女優が、ある時娘を連れて舞踏會に往つた事があつた、會が果てての歸り途に、母親は車のなかで夫となく娘に訊ねた。

「お前今日ウィリソグさんと温室に長く入つてたやうだね。さうでせう。」

「ね、入つてたわ。あたし自分ではそんなに長くとも思はなかつたけれど………阿母さん見えてらしたの。」

娘は平氣な顔をして言つた。

「何をしてたのだい。ね、何を………」

阿母様の女優は胡散さうな顔をしてじつと娘を見た。

「そんなに怖い目して見るのは厭——娘は嬌へたやうに頭をふつた。」ね、阿母さん、阿母さんも結婚前に宅の阿父さんと一緒に温室に入つた事があつて。」

「何故そんな事を訊くの。」

母親は少しうろたへ氣味だつたが、いつもの舞臺度胸で、何喰はぬ顔をしてゐた。

「さう言へば、そんな事もあつたやうだね、それが何うかしたの。」

「然う。阿母さんも有つたの。」娘は護謨人形のやうに急に母親に飛びついた。

「やつぱり往時も今も同じだわね。」

ほんごに然うだ、往時も今も變りはない。阿母さんに天國だつたところが、娘に地獄でありやうがない。

### 名女優の冷笑

劇は一人で出来るものでないから、俳優達の互の呼吸が合ふといふ事が何よりも大事であ



る。先年道頓堀で仁左衛門と鴈治郎との顔合せ興行があつた。兩優とも若盛りで人氣を争つてゐる間柄だつた上に、出し物は假名手本忠臣蔵で、仁左が師直、鴈が判官といふ役割なので、雙方の最良々々は兩棧敷に分れて、めいめい好きな俳優のために大袈裟な力添をしたのだつた。派手好きな鴈治郎は、刃傷の場と思ひきり派手な行き方をして、舞臺を巧く引つ凌へて往かうと註文をつけてゐたらしくかつた。で、火熨斗をあてた白襦袢のやうに、眞青に鱧子張つて舞臺へ出た。すると、案外なのは相手の仁左の師直で、これはまた糊氣のぬけた皮肉な、いつもの型とは打つて變つた冷い演り方なので、鴈治郎の判官は刀へ手をかける事も出来ないで、大弱りに弱つてしまつた事があつた。

英吉利の名女優エレン・テリイがひと頃氣難しやで聞わた或る男優と一緒に舞臺に立つてゐた事があつた。男優は幕がすむと、例の氣難かしい顔をして樂屋へ入るなり、エレン・テリイが大事の正念場なのに、自分の顔を見てにやにや笑ひ續けて居るので、舞臺が慥れて芝居が演にくくて仕方が無いと言ひ出した。

「いやに名優面をして、人の舞臺を見下すやうな笑ひ方をしやがる。一度思ふ様油を取つてや

らなくつちを。」

で、到頭同じ劇場にゐる女優あてに手紙を書いて持たせてやつた。手紙にはこんな文句があつた。

「こんな事を申し上げるのは、全くお氣の毒で堪りませんが、私は貴女がいつも舞臺で私の方を御覽になつて笑つてばかり居られるので、芝居が仕にくくて仕方がありません。あれでは全く打毀しです。さうかこれからは、那處が正念場だといふ事をお考へになつて、貴女の態度を變へていただきたいのです。」

エレン・テリイはその手紙を見たが、相變らずにやにや笑つてゐた、そして次ぎのやうな返事を書いた。

「それは貴方のお穿き違へですよ。私は舞臺でなんか貴方の事をちよつとも笑ひは致しません。笑ひたいんですけ、自宅へ歸るまで堪へてゐるんですよ。」

### 應變の蕎麥屋



美術批評家のS氏が、京都へ来て、Yといふ名高い畫家の門を訪ねた事があつた。畫家の玄關には何處かの註文だを見えて、素晴らしい六曲金屏風が立てかけてあつた。屏風には墨繪の山水が描きかけてあつたが、何處か氣に入らぬ節があつたと見えて、太い墨筆で、惜し氣もなくさつと十文字に塗り消してあつた。S氏は主人の畫室に通された。畫家は側に擴けた紙本に、一箇百圓もしさうな唐茄子を描きかけてゐたが、客が入つて來たのを見ると、繪筆を投げて此方に向き直つた。

「や、お出でなさい、お久し振ですな。」

慇懃言つて、繪の作家と批評家とは向き合つた。大抵の場合、作家と批評家とが向き合ふと表つ面は互に感心したやうな事を言つて、腹のなかでは執方からも馬鹿にし合つてゐるものなのだ。二人は持合せのお世辭を取り交した。もしかお互に狐のやうな尻尾を持つてゐたならば、立派な畫家は、皆尻尾を持つてゐるものと言ふだらうし、畫家も傑れた批評家は、大抵さうだとお愛相を言つたに相違なかつた。

談話の途中で腰を折曲げるやうにして執事が入つて來た。手には幾通かの紙包を持つてゐた。

「今朝方から註文がまたこない参りました、……」執事は紙包を畫家の前に押し並べた。包みには五百圓とか千圓とか書いてあつた。「一應お断りましたんやが、夫でも無理矢理に置いて参りましたな。」

「そないお預りしといたかて迎も描けへんさかい、一々あとからお返しして。畫家は汚い物のやうに、態々外つ方を向いて言つた。

夫を目の前で見せつけられたS氏は、宿に歸つて、一部始終を相宿の岩村透氏に話した。

岩村氏は佛蘭西仕込みの、悪戯にかけては誰に負を取らない人だつた。

「夫は面白い。一度そんな紙包を俺にも見せて貰はうぢやないか。」

岩村氏は早速あとからまたY氏の許を訪ねて往つた。

だが、今度は執事は何物も持出さなかつた、いや、持出さなかつたのではない、紙包みの代りに羊羹の入つた菓子器を持ち出して、叮嚀に頭を下げて引きさがつた、——暫く経つて、岩村氏は失望して外へ出た。口の悪い岩村氏はS氏に言つた。

「まるで應擧がお蕎麥屋の店を出してゐるやうぢやないか。」



S氏は何の事だか、よくは判らなかつたが、「ふふむ。」と言つて唯笑つて置いた。凡てよく判らぬ事は、笑つておくに限る。

## 豆腐と英國人

講談師細川風谷が、以前郵船會社の歐洲通ひの事務長をしてゐた頃、お國自慢の英國人に、何がな日本料理の珍しい物を見せたいものだと思つて、色々考へた末が

「豆腐にしよう、豆腐なら流石の英國人も吃驚するだらうからな。豆腐だ豆腐だ。」

と、豆腐に定めてしまつた。そして横濱で豆腐を拵へる機械一式を調へて船に積込んだものだ。

船が倫敦に着くと、風谷は直ぐ郵船會社の支店に、その頃支店長を勤めてゐた根岸氏を訪ねた。風谷はにこにこもので言つた。

「今度の航海には珍しい食物を持つて來ました。貴方がお言ひ當てになつたら差上げてもいいと思ひます。」

「何だらうね。根岸氏は物好きの眼を光らせた。「茗荷の鹽漬でももあるかな。那なら吾輩大好物だが。」

「いや違ひます。もつとも珍らしい物です。」

「それぢや、うるかだらう、あれも吾輩大好きさ。」

根岸氏は狗のやうに舌嘗めずりをした。

「お氣の毒様ですが、うるかでもありませんよ。風谷は態々軽い調子で言つた。

「お嫌ひかも知れませんが、實は豆腐なんです。」

「なに、豆腐だつて。根岸氏は膝を乗出す機みに椅子から滑り落ちさうにした。「豆腐なら吾輩何よりも好物なんだ。うるかよりも、茗荷の鹽漬よりもね。だが、何うして豆腐が持て來られたね。」

根岸氏は正金銀行支店の中井某氏が、以前豆腐の製造機械を取寄せて、豆腐を拵へにかかつたことがあつた。するに、さういふものか出來たのは鋸屑のやうなカラばかりで、肝腎の豆腐は少しも見られなかつたといふ事を話した。そして氣遣ふやうに、



「君が豆腐といふのは、その土蔵のやうな四角い恰好をした奴なんだね。」  
なごらわさわざ駄目を押した。

風谷は胸を叩いて保證した。そして機械を取寄せて、汗みづくになつて拵へにかかつた。仕合せと豆腐は出来た、少し色は黒かつたが、これもこれも土蔵のやうな恰好をしてゐた。

「巧い巧い。みんな四角い形をしてら。」

根岸氏は手を拍つて喜んだ。そして出来る事なら、この機会に男をも、女をも、駝鳥の卵をもみんな土蔵の恰好に鑄直したいと思つたらしかつた。

根岸氏はその豆腐の一つを、ポウル箱に入れて、態々正金銀行の支店まで僮に持たせてやつた。根岸氏は幾度か僮に言つて聞かせた。

「壊すんじゃないぞ、大事の品物だから。」

僮は数多い英吉利人のなかで豆腐を見た最初の人だつた。ナポレオンの心臓を皿に盛つた軍醫のやうに、僮は兩手でポウル箱を抱へ込んで、人通の多い倫敦の町を、おつかな吃驚でそろそろ歩いて往つた。

## 豆腐後日譚

今日は細川風谷が豆腐の後日譚をする。——郵船会社の倫敦支店長根岸氏は、その日以来、毎日のやうに豆腐に舌鼓を打つにつけて、風谷と同じやうに、何となくして英國人にこの珍味が味はせたくなつて溜らなかつた。で、ある日の晩饗に、知り合ひの誰彼を餐んで、試しに一皿づつ出して見た。そしてこんな事を言つて吹聴した。

「日本の珍味です。東洋では主に僧侶さんの食物で、僧侶さんが賢くて、おまけに長命なのは、みんなこの食物の故だといはれてゐます。」

お客は燕のやうな口もとをして、氣味わるさうに一寸皿の物を嘗めたが、言ひ合はせたやうに變な表情をして、その儘匙をおいてしまつた。

案に相違した根岸氏は、今度は豆腐を白耳義に送り出さうと言ひ出した。ブラッセルには亡くなつた本野一郎子が公使として駐在してゐたから、そこへ進物にしようといふのだ。

風谷は二つ返事で承知した。その四五日といふもの、この男の頭は豆腐ですつかり詰まつ



るたのだ。もしか根岸氏が亡くなつた友達に豆腐が食べさせたいと言つたら、この男は豆腐を一皿持つて態々地獄まで下りて往たかも知れなかつた。——風谷は白耳義進ひの船の中で、汗みづくになつて豆腐を拵へた。そして船がアントワープに着くと、鉄力の罐へ叮嚀にそれを納めてブラッセルに急いだ。

ブラッセルの日本公使館では、仕事に草臥れた本野子が、贅澤な脇掛椅子に凭りかかつて、「すつかり草臥れちやつた。晩には何を食つたものだらう。」

と好きな佛蘭西語で晩食の事を考へてゐたところだつた。本野子は澤庵漬と武士道との外は、きんな佛蘭西語をでも知つてゐて、夫で物を考へるといふ風な人だつた。

本野子は眼の前に土蔵のやうな四角い豆腐を見た。そして覺悟す、

「豆腐だな。これは珍らしい。」

と、不馴れな日本語で叫んだが、それに氣がつくと、慌てて佛蘭西語で考へ直したらしく、今度は直譯するやうにほつりほつり語を切りながら言つた。

「それぢや、今晚は日本流に牛鍋でもつく事にしようかな。」

其晩は風谷も公使館員達と一緒に、本野公使をなかに車座となつて、牛肉と豆腐を煮て食べた。皆は豆腐をうまいと言つて賞め立てたが、風谷は何だかまだ賞め足りないやうに思つた。其晩食へ残りの豆腐が少しあつた。本野子は自分ひとりで然う然う食へるのは勿體ないといつて、その頃和蘭公使を動めてゐた珍田捨子<sup>チンテンノシ</sup>を、わざわざアムステルダムから呼び寄せて、日本式の晩餐會を開いた。

## 地獄の住人

英國の首相ロイド・ジョウジ氏は、あの通りときばきき物の運ぶ人だけに、さうかするに他に憎まれ易い。今英國政治家で敵をたんと持つてゐる人と言つたら、氏などは其の随一人に相違ない。自分でもこの邊の消息はよく知りぬいて居ると見えて、ある時こんな事を言つた事があつた。

「泳ぎの達者な男が、河つ縁をぶらぶらしてゐると、水に溺れかかつた者の泣き聲が聞えるのだ。その男はいきなり河に飛び込んで、其奴を助けてやつた。助けたのは斯くいふロイド・ジ



ヨウジぢやないか。それを今更自分を突き落さうなんてあまり酷い。」

聞いてみるに少し酷いやうなところもある。

今度の戦争前、このロイド・ジョウジ氏が田舎へ往つて政治演説をしてゐた事があつた。地方自治の事が何かで、氏は例の白熱のやうな雄辯で、自治は愛蘭にも、自治は蘇格蘭にも、自治は威耳斯にも許さなければならぬと言つて、勢ひ込んでとんと卓子を一叩しつけた。

「賛成！ ついでに地獄にも自治が一つ欲しいや。」

聴衆のなかから、冷かしが猿のやうなきいきい聲で突つ走つた。

「大きに然うだ。地獄にも自治が要るに相違ない。」

ロイド・ジョウジ氏は聲のした方を振り向きながら、落つき拂つて言つた。「誰もが自分の住んでる國に自治を欲しがるに相違ないんだから。」

聴客は夫を聞くと、きつと二度に笑ひ出した。可哀さうに冷かしを言つた男は、地獄の住民にされてしまつたのだ。

## 汗

十二日から道頓堀の浪花座に名人會といふのが開かれてゐる。長唄の孝次郎、勝四郎、常磐津の和佐、清元の家内、舞踊の鹿島恵津子——これを見ても、格別名人らしい顔觸でないのが愛嬌である。

お隣の中座には、切の奴道成寺に、長唄では山左衛門、伊十郎、常磐津では松尾太夫が勤めてゐる。浪花座のに比べると、大分顔觸が光つてゐるだけに、件の名人達も流石に氣がさしてならない。で、興行の前の晩打揃つて中座の樂屋を訪問したものだ。

山左衛門と伊十郎とは差向ひで、自分達の幼馴染の噂でもするやうな調子で、辨慶や椀久の話をしてゐるが、入つて来た客人の顔觸を見ると、態と慌てて蒲團を滑り下りた。

「これはこれは、現代の名人方であらうつしやいますか、知らない事までお出迎へにもあがりませず、平に、平に……」

山左衛門と伊十郎とは蠅のやうに疊にへばり着いてお辭儀をした。名人達は部屋の入口にへ



たりと坐つたまま、櫻桃のやうに眞つ赤になつた。  
 「どうぞ、それだけは言はないで置いて下さい、拜みます拜みます。」  
 と言ひ合はせたやうに掌を合せて拜む眞似をした。見るに、名人達の額は汗でぐつしより濡れてゐた。

ミイシャ・エルマンといへば露西亞生れの名高い提琴弾きである。ある時同じ露西亞生れのヤアシヤ・ハイフエツツといふ名高い少年提琴手の獨奏會が、紐育のある樂堂で催されたので、友達のリオボルド・ゴドキスキといふ洋琴弾きと一緒に聴きに往つた事があつた。

少年音楽家の演奏は、實際素晴らしいものであつた。靈魂の底まで攪き亂された聴衆は、曲が済むと浪のやうな喝采を浴びせかけた。そのなかでエルマン一人は、眞青な顔をして石のやうに黙りこくつてゐた。

暫くすると、二度目の演奏が始まつた。前にも立優つた出來で、聴衆は唯もう無中になつて手を拍つて驚嘆した。その取り逆せた容子を見てゐたエルマンは、懷中からハンケチを取り出して、そつと額の汗を拭いた。そして小聲で側にある洋琴手のゴドキスキに耳打ちをした。

「今夜は馬鹿に蒸やうだね、君はさうは思はないか。」  
 「いや、何ともないよ、」人の悪いゴドキスキは汗ばんだ友達の顔を見ながら言つた。「僕はピアノニストなんだからね。」

### 佛 國 領 事

役人といふものは、何處の國でも兎角氣むつかしく出來てゐるもので、個人としては、交際上手な佛蘭西人でも、役人となるに得て氣むつかしやが多い。

近く子貢に榮轉する筈の、神戸駐紮佛國領事なきも其の一人で、この人は今だに領事館に電話を引かうとしない。この忙がしい世の中に何うした理由からだに訊くと、領事は氣難しい顔を一層険しくして、

「電話を引くと、他からうるさく用事を言つて來るから困る。私に用事があるなら、領事館まで出掛けて來たらいい筈だ。」  
 と言つてゐる。



領事は飼猫や將棋の駒やと同じやうに、自分の名前を一つ有つてゐる。それはシャルパンチエーといふ名で、結構な名前だが、このシャルパンチエーは英語でいふと、カアベントア、日本語では「大工」といつて、朝から晩まで金槌を叩いて暮してゐる、紺の法被に鉢巻をした男の事である。

そんな譯で、領事はこんな事があつても、自分の領事館のなかでは「大工」といふ語を使ふ事を許さない。佛蘭西語でシャルパンチエーといふのは、天にも、地にも自分一人のために拵へられた固有名詞で、普通名詞として燕のやうな紺の法被を着た大工を呼ぶなとは、以ての外だと思つてゐるのだ。

ある時、館員の一人が門の毀れを繕はうとして、領事の前へ出た。そして何の氣もなく

「御覽の通り門がひどく痛んだやうですから大工を呼びたいんですが。」

と、うっかり口を滑らすと、領事は苦味丁幾を飲んだやうに苦い顔をして、外つ方を向いた。そして「門の修繕など何うだつていいよ。」

と一言いつたきり石のやうに黙りこくつてしまつた。

で、それに凝りた館員は、佛蘭西語の辭書をいろいろ捜し廻した揚句、今では「大工」の事を「Menuisier」

と呼ぶ事に定めてゐる。「ムニエイジエ」は指物師の事だが、然ふいふと、領事は二つ返事で直承知して、門の修繕は愚な事、齧齒の手當から、臍の掃除まで指物師にさし兼ねない程にここに顔でゐるのだ。

## 吝人坊

和泉の岸和田にTといつて金銭を出すのが何よりも嫌ひな老人の金持がゐる。今の實業家で自動車に乗りつけないやうな人は滅多にあるまいが、T氏はその少い一人である。偶に人が自動車を勧めるに、T氏は綿屑で一杯詰つたやうな頭を強く掉つて、

「あれに乗るに、金銭が逃げる様な氣持がしますわい。」

と言ひ言ひしてゐる。

そのT氏が最近仕方なく自動車に乗つた事がある。何でも親戚の者が播州垂水で結婚をする



其式に顔出ししなければならぬので、時間の都合で岸和田から垂水まで自動車を走らせる事になつた。T氏は革の財布の口をしつかり紐で括つて自動車に乗込んだ。  
乗つて見ると、案外氣持がよかつた。だが、氣持の良いものに油断をしないといふのが、この爺さんの主義である。

「へつ、自動車の奴め、俺を胡麻化さうたつて、然うは往くもんかい。」  
爺さんは態々苦り切つた顔をしてゐたが、自動車はそんな事には頓着なく、鼻を鳴らしながら駈て往つた。

自動車が飛田の附近へ來ると、汚い豚小舎のやうな家から、一人の若者が轉がり出して、車の前に大の字なりになつた。T氏ははつきりなつて、覺えず革の財布を握り締めたが、其一刹那運轉手は手際よくびたりと自動車を停めた。

「さあ、轆きやがれ、轆きやがらんかい。」  
轉がつた無頼漢は、埃のなかで蛙のやうに手足をばたばたさせながら喚いた。附近には同じやうな無氣味の輩がそろそろ集つて來た。

物に馴れた運轉手は餘り騒がなかつた。靜かに車の中の爺さんをふりかへつた。

「いかが取り計らひませう。幾らかお與り下さいますませうか。」

「手の内をかい、いけないよ、そんな事は。」

「でも、金が物言ふといふ事がございます、別けてこんな輩には……」

「なに、金が物を言ふ……」

爺さんは胡散さうな眼つきで運轉手の顔を見た。「成程お金は物を言ふよ。大抵の場合さやうなら！」

と言つて、さつさと出て往くもんだよ。」

道では無頼漢が朋輩から貰つた煙草の吸殻をふかしふかし、相變らずばたばたしてゐる。運轉手はぶつくさ言ひながら、車を後に引き返した。そして大廻りに廻り路をして、日の暮方にやつと垂水に着いた。爺さんは革の財布を握り締めながら、やつとこなたと自動車から下りた。そして獨語のやうに言つた。

「速い速いといふが、この分ちや自動車も餘り速くはないな。」



バルザック

佛蘭西寫實派小説の開山バルザックは、随分たんに小説を書いたが、それだけではまだ書き足りないで、脚本の方へも脚を踏み出さうとしてゐた。ある時友達と二人巴里の大通りを歩きながらこんな話をした。

「僕も一つ脚本でも書いてうんと金儲をしようかな。なに、本さへ出来上つたら、請合つて四五十回位は舞臺に上せてみせるさ。一回の揚り高がざつと五千法として、百五十回で七十五萬法。其なかから脚本料に十二パーセントを取るとして、少くとも八萬法にはなる筈だね。」  
バルザックは胸算用をしながら寝不足さうな眼をあけて、じつと友達顔を見た。友達はお附き合ひに調子を合はせた。

「なる程さう聞けばさうなるね。」

「さう聞けばぢやないよ。實際さうなるんだよ。」とバルザックは大きな頭を掉つた。「この外に劇場以外から入る収入が先づ五千法。それから脚本一冊の賣値が三法として三萬部でざつ

「……」

「もう判つた〜よ。」

と友達は手を掉つた。

「ほんごに結構な話だから、さうかその中から三法だけ今貸してくれたまへ。」

「うむ……」バルザックは家鴨の絞め殺されるやうな聲を出して眼を白黒させた。

勇 智 仁

憲政會の代議士の誰彼が先日早稻田の邸を訪ねて、今度の總選舉に對する大隈老侯の意見を訊いた事があつた。

「古から智仁勇といふ言葉がある」と侯爵は魚のやうに口を尖らせて皆の顔を見た。「手つ取早く響へてみたら、智は狐、仁は庄屋、勇は鐵砲であるのである。」と言つて、瘦た筋だらけの腕を鐵砲のやうに、客の鼻先に突き出した。

「で、古昔から智仁勇と文字通りに順序を付て、智を第一位に置いたやうぢやが……」



と侯爵は前に突出した腕を、だらりと狐の尻尾のやうに卓子の上に投し出した。「智は畢竟狐で、徒らに疑が多くて、却つて事業の妨げとなつたのである。」

「御説、御説、全く御説の通りで……」と一番右手に居た男は、感心したやうに禿頭を後から撫で下した。この頭は幸福にも今日まで一度だつて「智慧」の厄介になつた事が無かつた。

侯爵は其の頭をじろりと見て變な顔をした。

「次は仁で、先づ庄屋のお人好しいつた所ぢやが……」と投げ出した手を庄屋のやうに胸の上で拱んだ。ぢやが、當今のやうな時勢では、得て狐の智慧に騙され易くての。」

「御意、御意……」と一番左の男は、氣に入つたやうに二三度頷いた。この男は前の選舉に落選したのを、何よりも自分が仁者である證據だと、今でも思つてゐるのだ。

「所で最後の勇ぢやが……」

と侯爵は拱んだ手を解いて、鐵砲のやうにまた前へ突き出した。「今の政界に立つて、所謂高遠なる理想を行ふには、何よりも勇が無くつちやならんのである。そこで吾輩は近頃智仁勇の代りに勇智仁と言つて居るんぢや……」と言つて、筋ばつた脊骨でもつて卓子を一つさしんて

叩き付た。その勇氣におつ魂消たやうに、其邊の珈琲茶碗はがちがちと身軀をして飛上つた。「成程勇でござすな、今度はお互に一つ勇でも揮ひませうわい。」と客は寒さうな顔を見合はせて、一緒に立つて侯爵にお辭儀をした。そして玄關で待たせた車に乗ると、言ひ合せたやうに體を鯨子張らせて「勇だ勇だ。大いに遣るぞ。」と強て附景氣をしてゐた。

侯爵は旨いことを言つた。「智」だの「仁」だの、そんな結構な物の持合せの無い男には「勇」で納得させるに限る。夫に何よりも善いのは「勇」はお説教一つで十分で、侯爵の腹を痛めずに済む事である。

寺か女か

むかし嵯峨に獨照といふ僧が居た。黄蘗の隠元が日本へやつて來た折、第一に拂子を受けたのは、この獨照だつたといふからには、滿更の男では無かつたらしい。

この獨照がまだ小さな庵室に籠つてゐる頃、ひと秋雨のしよほしよほ降り頻る夕方、こんどんと門の扉を叩くものがある。獨照は何氣なく出てみると、若い女が外に立つてしくしく泣い



てゐる。

獨照が「何うかなすつたのかい。」と訊くと、娘は艶めかしい京言葉で理由を話した。夫に依るに、娘は中京邊の商人の一粒種だが、今日店の者大勢と一緒に山へ茸狩に往つた。初めて山へ来てみた嬉しさに、娘は一人で木立を分けてゐるうちに、つい連れにはぐれた。その内、日は暮れるし、雨は降り出すし、方方捜し歩いた末、漸々ここまで下りて来る事が出来た。「ほんまに御氣の毒さんですが、今夜一夜だけお泊めやお呉れやす。」

女は慙ういつて丁寧に頭を下げた。獨照は女を庫裏に連れ込み、濡れ徹つた其の着物を脱がせて、鼠色の自分の着物を被せてやつた。そして圍爐裏に櫓をくべて、女はそこに打捨らかした儘、自分ひとり煎餅蒲團に包まつてごろりと横になつた。

「まあ、いい氣な和尚さんやわ、御自分ひとりお蒲團に包まつて。」  
女は蠶蟲のやうに坊さんの包まつた蒲團をめくり掛つた。そしてその端の方に自分も小さく横になつた。

夜が更けて、本尊様が寢言でも仰有らうといふ頃、獨照はがばと跳起きた。そして突慥食に「何をやる、……」

と叱りつけながら、その儘女を引きずり起して門の外へ押出してしまつた。女は扉につかまつて、

「あんまりきすね、和尚さん……」

と泣き入つてゐるが、獨照は耳を藉さうとしなかつた。

その噂が村の人に傳はつて心堅い和尚様だといふので、獨照は立派な寺を建てて貰つた。寺がいいか、女がいいか。いつ迄経つても問題である。

### 豆本その他

紙が高い、紙が高くなつたといつて、紙の節儉が頻りにやかましく言はれてゐる。そしてその方法の一つとして、新聞や雑誌の文字が小さい活字で印刷される事が流行り出した。——紙の節儉といへば、エリザベス時代のある英國人は、紙が節儉したいからといつて、胡桃の殻に



しまはれる程の豆本に、新約全書をつくりを書き込んだといふ事だ。

また或る英國人は同じ胡桃の殻に揉み込まれるやうな一枚の紙に「イリヤッド」全部の文句をそつくり書きこめた。「イリヤッド」といへば、ホオマアの傑作で、ざつと一萬五千行の長い詩だが、その男は紙の両側に七千五百行づつ克明に書き込むものだ。

また同じ頃の或る伊太利人は、十八吋平方の紙に、自分の好きな詩を三千行ばかり書き込むで、閉さへあるといつてもポケットから取り出しては、それに読み耽つてゐたといふ事だ。

恠ういふ風に文字を小さく書く工夫をすれば、紙は幾らでも節儉出来るものだ。だが、夫では眼によくないといふかも知れないが、それは無論の事眼を傷める。しかしこの場合眼などは何うでもよい。問題は紙を節儉する事が出来れば、それで十分なのだ。

□

米國の前國務卿ブライアン氏が、先年西部のある市へ講演に出かけた事があつた。ところがその降り続いた雨の故で、河が溢れ鐵路が水に浸つたので、汽車は途中で立往生をしてしまつた。ブライアン氏は、ぶつぶつ小言を言ひながら、逆も約束の時日までには先方に着きかねる

といふ電報を打つた。鐵路が水に浸つたといふ文句は精々節約して

“Wash on the Line”

としておいた。

夫を受取つた講演會の幹事は “Wash” を洗濯と讀んで、ブライアン氏が多分一枚しかない亞麻の襦袢でも洗濯にやつて、その故で遅れるのだらうと早合點してしまつた。(實際幹事自身は麻の襦袢を一枚しか持つてゐなかつたらしい)で、早速返電を打つた。

“Never mind your wash, Buy another shirt at our expense and come anyway.”

(心配無用、費用は當方持ちにするから、別のシャツを買つて、ともかくも来て下さい)

## 狸 と 猿

山奥で獵をするものに聞くと、狸は安々と手捕に出来る獸は外に無いさうだ。追ひ詰めて獸が狼狽へるとき、

「おや、もう死んださうな。」



といふと、狸はいい氣になつて、ころりと横に倒れた儘死んだ眞似をする。その時手捕にすれば譯もなく出来るといふ事だ。  
幾ら普通教育が行き渡つたからといつて、狸が人間の語を習つたといふ事も聞かないから、夫が眞實か何うかは請合ひかねるが、獵師はこの仕方て幾らか狸を手捕にしたと自慢をしてゐる。

また獵師に聞くに、猿を手捕にするに、よく皮を生剥にする。皮は其儘乾かして冬着にするのださうだが、眞裸にされた猿は、自分の毛皮を見てはらはら涙を流すさうだ。

豆

猿

文展がまた開けた。入選した畫家の苦心談を讀んでみると、大抵影に忠實な細君が居て、搦斷茶斷をしたり、神様に百日の願を掛けたりしてゐる。女といふものはよく目端の利くもので、平素から良人の腕前はちやんこ見貫いてゐるから、其の力量一つでは逆も背負ひ切れないと見ると、直ぐ神様の許へ厭けつける。

日本の畫家が慙うした目端の利く、忠實な女房をさらに持つてゐるのは、實に結構な事だが、支那では女の出来が日本ほさ思はしくないので、彼地の畫家は女房の他に今一つ豆猿を飼つてゐる。

豆猿といふのは、ポケットや掌面のなかにでも、圓め込んでしまはれさうな小さな猿で、支那でも湖南あたりにしか見受けられない奴さんだ。

この豆猿は大層木炭が好きで、お腹が空くと、直ぐ木炭を強請つて食べる。だが、畫家といふものは、時々木炭を購ふ錢にも事を缺くもので、そんな時には猿は定まつたやうに墨汁の使ひ残しを嘗める。

何處の畫家でも、書家でも、墨汁の使ひ残しには難澁するもので、幾ら忠實なからと言つて女房に夫を食べさす譯にも往かないが、豆猿は好物だけに舌鼓を打つてべろりと夫を嘗め盡してしまふ。

だが、豆猿の好きなのは使ひ残しの墨汁の事で、文展に落選した女畫家の涙までも嘗めて呉れるか、何うかは請合はれない。豆猿は餘り水つぽい物は好かないさうだから。



## 猫と四斗俵

世の中に鼠ほご無益な餘計者は滅多にあるまい。あの鼠の征服者として猫を發見けた事は、アメリカ大陸の發見にも優る人生の重大事である。

ゲエテは其の「狐の裁判」で「猫は形こそ小さいが、分別もあり、哲學をも知つてゐる」といつた、實際猫は鼠を捕る以外に、哲學の素養があるので、よく色々の偉い人のお友達となる事が出来た。佛蘭西の名高い政治家リセリウが、死際に可愛い自分の飼猫に、少からぬ遺産を残したのは名高い話だ。

猫がその遺産を慈善事業に寄附したか、それとも利廻りのいい株でも買込んだか何うかは知らないが、よしんば其の遺産が無かつたにしても、猫は多くの哲學者のやうに空腹を抱へるやうな事は滅多にない、何故なら猫は哲學と一緒に鼠を捕る事をも知つてゐるから。

議員の俸給に極りがあるやうに、猫の食糧にも限りがある。往時から猫一匹が一年中の食糧は、ざつと米一俵としたもので、もしかこれ以上に食べるやうな猫があつたら、夫は大物食で、

哲學者とは言ひ兼ねる。

ところが斯の事實から、立派な一つの發明を仕遂けた男がある。夫は讃岐の瀬田忠左衛門といふお爺さんで、お爺さんは猫に四斗俵一つは餘り値段が張り過ぎる。

「俺なら其の半分で済ませてみせる。」と、自慢らしく言ひ言ひしてゐる。

實際お爺さんは夫を行り通してゐるのだ。その法といふのは收穫の時俵二斗を鼠一年分の餌として、土間の隅つこに俵の儘残しておくのだ。すると、夜になつて家中の鼠がこそこの這ひ出して来て、鰹腹それを食べるが、俵二斗で恰度一年分の餌に足るさうだ。

「慇んなにさへしておくと、鼠も溫和しいもので、米櫃一つ嚙らなくなる。お蔭で猫など餌はなくともいい。」

と爺さんは皺のよつた小鼻をびくびくさせてゐる。

だが、それは猫を唯の鼠捕りとして見た上のことで、猫はその外にまだ哲學者なのである。



お茶盗人

京都の眞葛ヶ原西行庵に小文さんといふ風流人がゐる。セルロイド製のやうな、つるつるした頭をした男で、そしてまたセルロイド製のやうに年中から笑つて暮してゐる。小文さんが何うして暮してゐるかは誰にも判らないが、京都には然ういふ生活を仕てゐる人はざらにあるのだから、格別氣に懸けずともよからう。兎に角小文さんは西行庵の茶室で茶を立てたり、花を活けたりして、暢氣に暮してゐる。その小文さんに妙な癖が一つある。それは毎晩日が暮れると、ぶらりと家を出て、祇園町をぶらつくのだ。意氣な三味の音が雨と降るなかを、セルロイド製のやうな頭を掉りく／＼三條へ出て、橋詰の萬屋で一吋小休みする。これが一年中押つ通して小文さんの日課のやうになつてゐる。

先日の晩、小文さんが例のやうにぶらつきに出掛ける時、都合よくその間に盗賊が庵のなかに忍び込んだ。都合よくいつたのに何の不思議があらう、小文さんは談話が好きだ。たゞ

へぎんな物が盗まれてあらうと、

「まあ、お聞きやす、昨夜家に盗人が入つてましたんや。ほんまごつせ、わらい盗人なんや、それが……」

と、會ふ人毎に吹聴が出来れば、盗まれた物位は、それでけろりと忘れる事の出来る人なのだから。

小文さんは歸つて来て、初めて盗人が入らしたらしいのに氣が注いたが、別に吃驚もしなかつた。何故といふのに、家には盗まれて借しい物は、何一つ置いてゐないのをよく知つてゐたから。小文さんは色々詮索して、やつと茶壺と茶筌とが無なつてゐるのを氣が注いた。

小文さんは確と手を打つた。

「嬉しい盗人やおへんか、茶壺と茶筌を盗むなんて、やつぱりお茶の心得がおすのやなあ、金目の物やつたら、立派な茶匙がおすのに、それは残しておいたるんやさかいな。」

と會ふ人毎にそれを言つて感心してゐる。

「立派な茶匙がある……」



小文さんも巧いことを言つたが、それを盗まなかつた盗賊の方は、もつと目が高かつた。——  
それにまた盗賊は腹が空いてゐたのだ。

貧民視察

米騒動が方々で持上つた時、富豪M氏の邸では、奥の間で主人と若い夫人とが差し向ひで香りの高いココアを飲んでゐた。

「あなた、世間は随分物騒らしい事ね。」

夫人が憐れいふと、主人のM氏は禿げかかつた頭をむつくり持ち上げた。

「さう、かなり物騒らしいね。」

「こんなに騒ぐところを見ると、下々では生活が苦しいんでせうね。」夫人は悲しげな顔をした。「いかゞでせう、騒ぎが少し鎮まりましたら、御一緒に貧民の視察にでも出掛けましては。」  
「いいだらうな。是非一つ出掛けませう。」夫人の言ふ事だつたら、何一つ背いた事のないM氏は直に同意した。

騒動が鎮まるに、夫人は約束通り貧民視察に出掛けるのだと言つて、M氏を促き立てて自動車に乗つた。夫人は貧民窟へも、天国へも、それよりもつと素晴らしい監獄へも、自動車に乗込みさへしたら、その儘一足飛びに往きつかれるものだと思つてゐるのだ。

自動車は鴻の臺をさして走つた。夫人の考へでは、貧民といふのは百姓の事で、百姓の家さへ見たらごん底の生活を見た事になるのだつた。自動車は狭い田舎路に行き詰つたので、二人は下におりた。夫人とM氏は軽い雪駄を鳴らしながら、稻田の細道を歩いて往つた。露西亞の過激派のやうに腹が減つてゐらしい蝦蟇が、草の間からむつくと顔を出した。自由戀愛家のやうな蟬が雄と雌と抱き合つて跳ね合つたりする度に、二人は仰山さうに聲を立てて吃驚した。

「あなた、これがお米なの。それもお米？」と夫人は稲穂の一つを扱いて手に取つた。「まあ、驚いた、みんな、外套を着てますわよ。」

實際米粒はどれもこれも女優のやうに稷穀といふ外套を着てゐた。M氏は陽気に笑つた。

「ははは。麥ぢやない、これはお米だよ。この外套を一々白で磨り落して、それからまた晴し



上げた後でなくつちや、お互の口へのほらないんだ。」  
「まあ、大變ね、それを皆百姓がしますの、氣の毒だわね。」夫人は心から氣の毒さうに言つた。

「さう氣の毒といへば氣の毒だね。」M氏は帽子をぬいで額の汗を拭いた。

二人は夫から田圃の中にある百姓家を訪れた。互いでは薄汚い女房さんが、裸足のまま井戸側で釣瓶から口移しにがぶがぶ水を飲んでゐた。

「まあ、あなた御覽遊ばせ。」夫人は小鳥のやうに眼を睜つて、主人の袖を引張つた「あの女は私達のやうに雪駄も穿いてなけりや、洋盃も持つてないかして、あんなに口移しに水を飲んでますわ。」

「うむ。」M氏は唸るやうな聲を立てた。そして京都で煙草屋をやつてゐた當時、臺所の井戸で釣瓶からがぶがぶ牛のやうに音を立てながら飲んだ口元を撫でまはしながら言つた。「とにかく氣の毒なもんだて。」

二人はめいめい社會のきん底を見て来たやうな氣持になつて、家に歸つて来た。そして贅澤

な寝椅子に體を沈めながら考へた。  
「とにかくいい物を見て来たて。」

二十五仙

大阪博愛社のK氏は頼べのない孤兒を養育し、教育するのを自分の天職として働いてゐる人である。ところが生憎日本には、孤兒や不良少年を拵へる紳士は多いが、その養育費を寄附して呉れる向は少い。

K氏は耶蘇教の神像を信仰してゐる。耶蘇教の神像は二羽の雀が一錢で買へる事と共に、日本人と亞米利加人は神像の前に兄弟である事を教へて呉れる。

「して見ると、米國から幾ら金を貰つて来たつて少しの差支もない筈だ、もともと同 なんだからな。」

K氏は慙う思つたので、喜捨金を募りに遙々米國まで出掛けて往つた。

無賃で天國へまでも往ける筈のK氏にとつて、桑港行きの二等船賃は決して軽い負擔ではな



かつた。だが、K氏は久し振に俄分限の同胞を訪ねるやうな、晴々しい氣持で船に乗込んだ。船は無事に桑港に着いた。K氏は空つほの大きな旅鞆を提げながら上陸した。

「さあ愈々同胞の國に着いたぞ。相手は懐中加減の好い輩だ、たんまり土産も出来やうといふものだ。」

K氏は口のなかで讚美歌を誦しながら、大跨に町を歩いた。町には夥しい人が出てゐたが皆他人らしい顔つきをして、南京鼠のやうに忙しきうに走り廻つてゐた。

K氏は鞆を提げた儘はたゞ立ち停つた。自分が訪ねて往かうとする町の方角が立たなくなつたのだ。で、道通りの人の中から、精々親切さうな、信道家らしい男を見出して呼びかけた。

「もしもし一寸お訪ねしますが、N町へは何う往きますかね。」

その男は立ち停つて此方を見た。眼つきが安い繪本にある大工のヨセフに似てるやうにも思つた。

「N町へはこれを右へ折れて、三つ附きの四辻を左に折れるといい。」

「有難う」K氏は同胞に禮をいふ心持で、一寸帽子の鏢に手をかけて別れようとした。

「もしもし」その男は呼びよめた。K氏は後方を振りかへつた。男は大きな掌面を小さい日本人の鼻先につきつけた。

「物を訊いて心附を出さないつて法があるかい。」

「幾ら出せば可いんです。」K氏はむつとして牡鶏のやうなきいきいした聲で怒鳴つた。

「二十五仙。」相手は濟まじきつて言つた。

K氏が財布から二十五仙撮み出して其の男の掌面に置くと、男はにつと笑つて小聲で辯解らしく言つた。

「こちらでは何んでもが金ですよ。」

白

髪

阪神急行電車のK氏は、この一二年めつきり頭に白髪が殖へて來たので、夫が氣になつて堪らなくなつた。で何かの會合で知合に出會すと、鼻先を見る前に、實業家といふものは、狗と同じで、鼻先さへ見ればその日の機嫌がわかるものだ。先づ頭腦へ氣をつける。そして相手の



額に白髪でも発見ると、にこにこもので愛嬌口をきくが、然もないに、急に厭な顔をする。そのK氏が最近東京へ往つた折、知合の結婚式に招かれた事があつた。来合はせたお客はいつ迄も美しい新夫婦の顔から眼を離さなかつたが、K氏は尻目にちらと若い二人の姿を見るとそのまま眼を移して皆の顔を見た、皆は鴉のやうな眞つ黒な頭髪を持つてゐた。

K氏はそわそわして、料理も咽喉へ通らない風だつた。「みんな言合せてやうに眞つ黒な頭をしてやがる。屹度何だらう、己を奇めようと思つて髪でも被つてるのだらう。」

さう思つて見ると、皆の黒い頭が鴉のやうにあんぐり口を開けて、一度に笑ひ出しさうにも思はれた。

すると、其の途端、今まで隣の大男の影になつてゐた白髪頭がふと眼についた。白髪も白髪も、米利粉をふり撒いたやうな白髪で、顔は蟹のやうに赭かつた。K氏はビフテキを切りさした儘、じつと其の頭に見惚れた。この素的な頭の持主は政友會の原敬氏だつた。

鴉のやうな仲間のなかに、白鷺のやうな原敬氏を見つけたK氏は、大威張でかちかち皿を

鳴らしてゐたが、暫くするに妙な事に気がついた。

「さうも原さんの顔が險相に見てならん、何となく人が悪さうだ。何故だらう。」

K氏は胡麻鹽の頭をじつと傾けて考へ込んでゐたが、皿が濟んで紅茶が出る頃になつて、漸とその理由が判つた。

「頭が白いからだ。それであんなに顔が險相に見わるのだ。」K氏は腹の中でこんな事を思ひながら、おつかな吃驚にそつと頭へ手をやつた。「さうも原さんがいつまでたつても人氣がよくないのも、事によつたら那の頭の故かも知れない。もしか那が寺内のやうに禿ても居ようものなら、もつと人氣が出てゐたかも知れない。」さう思ふとK氏は一層自分の胡麻鹽頭が氣に懸つてならなくなつた。で、友達の禿頭でも見ると羨しさうに舌打して

「いい恰好だ、何となく愛嬌がある。」と言ひ言ひしてゐる。



大正十三年三月十五日印刷  
大正十三年三月二十日發行

茶話 上卷

不許複製  
定價金二圓

著者 薄田淳介

發行兼印刷人 荒木利一郎  
大阪府豊能郡箕面村平岡四九九

印刷所 株式會社大阪毎日新聞社  
大阪府北區堂島裏町二丁目三六

發行所 大阪毎日新聞社  
大阪府北區堂島  
振替大阪四五〇番

同 東京毎日新聞社  
東京市丸の内  
振替東京二八〇〇番



大阪毎日新聞社發行

彼女の運命

菊池幽芳氏著

全二卷 定價各壹圓七十錢  
送料 十二錢

感性的であり近代的である彼女が愛慾と戦ひ傳統と戦へる傷ましい一生を描いたもので、大毎東日二百萬の讀者を熱狂せしめつゝある傑作。

白蓮紅蓮

菊池幽芳氏著

全二卷 定價各壹圓五十錢  
送料 十錢

純潔なる青年を回りて百合の如き少女と紅薔薇の如き麗の女を配し、波瀾曲折の人生を描ける魅力に富む一大傑作。

明窓集

水上瀧太郎氏著

定價 二錢  
送料 十錢

三田派の第一人者水上氏の短篇傑作集で、所謂名人の名作。群小作家の作品を抜くこと數版の傑作。

傷ける心

水守龜之助氏著

定價 壹圓七十錢  
送料 十二錢

裡に抑へがたき新人の覇氣と盛りなき情熱とを藏し、力強く讀者の胸に喰ひ入るもの著者の藝術である。震後新興文壇第一の讀み物。

線路の上

谷崎精二氏著

定價 壹圓七十錢  
送料 十二錢

谷崎氏が近來の精粹を收めたもので悉く鮮鋭な感能の所産ならぬけなく人間性の明暗兩面を最も深刻に表現した意義深い傑作集。

一人の女

加能作次郎氏著

定價 壹圓七十錢  
送料 十二錢

著者はひとり早稲田派の重鎮たるのみならず、日本文壇の中心作家として高く流行を超越した眞の人氣作家である。本書はその傑作短篇集。

麵麩

前田河廣一郎氏著

定價 壹圓六十錢  
送料 十錢

沈滞し切つた日本の文壇に一脈の生氣を漲らすものは著者の藝術である力に缺けた現文壇に一味の清涼劑を求むる讀者は來れ。

【へ社本け節のれ切品・賣販で店書・店次取聞新地各】

【へ社本け節のれ切品・賣販で店書・店次取聞新地各】



黒雨集

田中貢太郎氏著

定價 壹圓五十錢  
送料 十錢

餘りに科學に傷けられた我々の生活の上に再び美しい夢や空想を甦さうと著者は努力してゐる。講演と物語と小説の中間を行つた作

神に就て

柳宗悦氏著

定價 二圓七十錢  
送料 十二錢

我々の人生は惱みそのものです。その惱みから我々を救ふものは神です。我々の眞實の神を切實に求める著者の眞摯なる態度を見よ。

喞堂漫筆

尾崎行雄氏著

定價 壹圓  
送料 八錢

政治談あり、人物評あり、國體論あり、職業婦人論あり、料理談あり、本書一冊政界の飛將軍と膝を交へて語るの觀がある近來の快著。

旅から旅へ

石川欣一氏著

定價 壹圓五十錢  
送料 十錢

最近五六年を外國に旅した著者が、新聞記者的觀察を、詩人的情緒で彩つた高雅にして詩味豊かな旅行記。

パイプを

くはへて

石川欣一氏著

定價 壹圓三十錢  
送料 十錢

これは多く英文學に材をとつた著者の隨筆で、豊富な内容を輕妙な筆で讀ませて行くところに何ともいへぬ妙味がある。

摩耶子の

冒險

大原武夫氏譯

定價 壹圓八十錢  
送料 十錢

マヤ子は本當に愛らしい心臓の持主で、世の中の美しさを、そのおののく胸で眺めてゐるいちりしさとあどけさには誰でも涙くましくなります

鳩のお家

松原至大氏著

定價 壹圓二十錢  
送料 十錢

清らかに美しく、すなほに優しい子供的心を健全に育むために、細かい心と強い筆とを以て編まれたのがこの童話集です。

澄宮殿童謡集

下御作

小野賢一郎氏編

定價 八十八錢  
送料 八錢

宮様のお歌には眞實の自然が生きてゐます。生れながらの詩人でいらせられる宮様の御童謡に、本居、永井兩氏の作曲を添へたのが本書である。

【各地方新聞取次店・書店で賣取の切品・本社へ】

【各地方新聞取次店・書店で賣取の切品・本社へ】



釋尊から親鸞へ

大谷尊由師述

定價 五十  
送料 四  
錢錢

民衆の宗教眞宗の傳統をたづねて釋尊にまで溯つたもので、教祖親鸞を祖述した著書のうち最も權威的なことば申すまでもありません。

愛に就て

有島武郎氏述

定價 五十  
送料 四  
錢錢

巧なる引例と比喩とをもつて不可思議なる愛の眞相を平易に巧妙に委曲を盡して説明せるもの、巨星有島氏が世に残した尊い記念である。

童謡童話の研究

松村武雄氏述

定價 五十  
送料 四  
錢錢

児童心理、童話及童謡の精神分析學的考察、童話の起源及び本質の民族心理學的考察につき講述せるものその研究の深さは童謡學界の一大精彩

大阪毎日新聞、東京日日新聞各地取次店、全國各書店、大毎代理部にて販賣、品切れの節は御手数ながら直接本社へ御申込みを請ふ



終

